

毎日死ぬように生きるってことです

語り手 阪口倫造 (高校五期生 税理士) 聞き手 前川由里

いろんなことに手を広げた高校時代

—よろしく願います。今日は、阪口さんの人生に繋がってるものを感じたいので、その話をさせていただきたいです。

わかりました。

—ありがとうございます。じゃあまず、高校生活で一番印象に残ってる思い出とかって。

一番。一番ですか。ごめんなさい、一番なんですけど、二つあって。タイで家作りに行ったことと東日本大震災のボランティアに行ったことですね。

—すごい。タイは海外研修ですか。

海外研修ですね。今、タイってあります？

—ないですね。

—ないですか。

—バリがあります。

—バリになったか。どこ行かれましたか？

—私はポーランドとドイツのやつ。でも今年から始まったみたいです。

—うんうん。

—タイはどのような活動だったんですか。

まず、参加者三〇人弱やったと思うんですけど、あんまり裕福じゃない家庭で、ちゃんとした家もないっていう方のところに行って、みんなで煉瓦を一つ一つ積んで家を作るっていうような事を二週間かけてやって感じてですね。

—なるほど。すごい。二週間もずっと。じゃあ、家を作る活動だったんですか。

—そうですね。基本的には家を作っていました。その間、何かあったよ

うな記憶も。いや、でもその辺も覚えてないですね。なんか印象に残ってるのは家のことですね。みんなで協力してやって。で、家に住む予定になる家族が毎日遊びに来て、炊き出ししてくれて。すごい美味しいんですよ。それで、最後は、この家が出来上がり、さよならする時に、日本の歌、歌ったんですよ。

—うん。そうすると、向こうの人、もうボロボロ泣いてくれはって。全然言語わかってないはずなんですけど、なんか伝わるものがあるんだなっていうのが印象に残ってますね。

—それはすごい経験ですね。タイとかのご飯ってどんなものだったんですか。

—トムヤムクンってご存知ですか。トムヤムクンのすっぱい感じが、なんかタイ料理全般に、通じてるっていうような感じですよ。

—なるほど。

—いい思い出です。いい思い出。

—その経験から、将来に繋がったみたいなものありますか。

日本人は恵まれてるなと感じた。確かにそのタイの二週間の研修旅行の時だけ楽しくても、感動しても、持ち帰った後で忘れてしまったら何の意味もないんで、どうにかその感動というか、その印象に残ったものを日常に活かせられないかっていうのを考えたんですよ。

—へえ。

—で、どうしたかというところ、意識づけをしたということなんですけど、どういう意識づけかというと、「毎日死ぬように生きる」ってことです。日本での日常生活は安全で、全く死を意識することなどあり得ないのですが、タイではそんなことはないんです。治安的な状況が悪いといわけではないんです。例えば野良の犬がいるんですけど、噛まれたら狂犬病を発病するんですよ。四八時間以内でしたかね。病院行ったら助かるんですよ。例えば身近にそういう危険がタイにはあるんです。けど、日本にはない。タイには危険があるけど、日本にはほとんどない。日本

には様々な環境整備や生活支援、保護制度等があるっていうことで、平和でぬくぬく暮らしていけるんですけど、それでも、自分で自分に対してこう目標を掲げて、制約を設けて、その中でちゃんと一日やりきるっていうことを意識づけましたね。

―へえすごいですね。

帰ってすぐにはできなかったですけど、いまだに、しんどい時に思い出すのはそういう経験で、そんなに残ってる感動みたいなものを忘れたらあかんと思っています。よし、また、もつといい生活しようと思つて、ストイックな方に生活スタイルを変えていく努力をしようという風な機会を重ねてたら、その過程でいつの間にか今、「今日死んでもいいや」と思える日を積み重ねられるようになってきてるなって、今になって感じてますね。

―そうなんです、すごいですね。確かに「今日死んでもいい」やって思えるほど毎日頑張つて生きてる…。

今日死ねます？

―死ねないです（笑）

僕も死ねはしないですよ。嫌ですよ、死ぬのは。でもその感覚的な問題として、悔いはないかなっていうのはありますね。

―じゃあもう、やりたいって決めたらすぐに行動するタイプですか？

そうですね。僕はどっちかっていうとそっちのタイプで、興味関心が向いたらまずやってみるっていうところなんです。それもこじつけかもしれないですけど、タイで学んだことの一つかもしれないですね。時間がもったいないんで何もやらないうってことは。ただ老けていくだけなんですね。

―うん確かに。じゃあ、タイで学んだ後に、残りの高校生活で絶対にやっていきたいみたいなものはあったんですか？

それは。色々ありますで、全部はできませんでした。クラブ活動ではキャプテンもやりましたし、東日本大震災の時はボランティア団体を僕が立ち上げたんですよ、学校で。

―へえ、そうだったんですね。

そしたら、一気に百人ぐらい集まってしまったんで、その十七、八歳の僕にはとても器が追いついてなくて、キャパオーバーで回ってなかったんですよ。そういう訳でそっちも全然やりきれない状態でした。

キャプテンはキャプテンで初めてのことで、チームをまとめることが必要でした。で、そのチームをまとめるっていう仕事と、選手としても高み目指さなあかんっていう中で、全然どっちも満足いく成果を得られなかった。それで、全てが中途半端になってしまつて、高校二、三年は苦しかったですね。どっちかというと。

―確かにそうですね。背負うものが多かった。

背負っていったらかつこすぎですけどね、手を広げすぎて。

*

立守の魅力は、社会に出てからめっちゃわかるんです。

―うんうん。

進学校じゃないじゃないですか。その分、大学受験のための勉強しない分を他のいろんな経験をするために時間を使ってるんで、それが社会に出てからめっちゃやくちや役立ってますね。

―そうなんです。やっぱり他の学校の人と経験値が全然違うんですか。

違いましたね。なんか大学進んで。あ、大学もう決めましたか。学部。

―学部ですか。多分、総合心理で行くと思います。でもオープンキャンパスで見れてないので変わるかもしれないんですけど。

え、総合心理ってありましたっけ。

―え、なかったんですか？

なかったと思います。どこにあるんですか。

―大阪茨木キャンパスに。

え、そうなんです。僕、茨木キャンパスです。経営学部やったんで。でもなかったですそんな。新設ですね。

―ちよつと新しいとは思いますね。

うん。

―元々映像学部もいいなって思ってたんですけど。

映像学部ってありましたか。

―映像は、今はO I Cなんですけど、前は衣笠でした。

―あ、じゃあちよつとわかんないですね。ちなみに、高入ですか。

―高入です。

―じゃあ、高校受験してはるんですね。なるほど。僕は中入やったんで、受験はもう中学受験だけやったんでコンプレックスがありました。今は税理士の試験を受けてそこでコンプレックスは無くなったんですけど、大学行くときに附属校以外からの受験生と比べて大丈夫かなと思っただけです。正直、レベルが違うんじゃないかみたいに思ってたんですけど、全然そんなことなかったです。大学の課題とかでグループディスカッションしようとかいう課題があったり、グループで何か課題をこなしてきてください、またプレゼンテーションしてくださいみたいな課題があったりするんですけど、そういう時とかは立守、多分すごぶる強いですね。そのやり方を学んでない他の進学校の人たちとは、全然違うなと感じました。

―そうなんですね。

―自主性とか、自分で考えて行動を起こしてそれを改善していくっていうのは、ある程度いろんなことやったら当たり前になつてくると思うんですけど、その当たり前を進学校だとかなかなか学びにくいんじゃないかなと思うんですよ。進学校では「正義」は偏差値を上げることであつて、ゴールは「大学に合格すること」なんです。そこちよつと違います。なんか目的が。

―確かに私も中学校の時はもう入れたらもうゴールって思っていました。そうなりますよね。

―立守に入ってから勉強しなすぎて結構、不安やったところはあります。

今テストどれぐらい取ってるんですか。

―うーん。回によつてバラバラで。数学苦手なんですけど、四〇点台のときと八〇点台のときもあるみたいな。

大丈夫。大丈夫です。僕も数学七点とか取ったことあるんで。

―七点ですか。それいっすか。

高三です。高二で全学年で、トップ取りたいな思つて、めっちゃ勉強した時あつたんですよ。で、それで結果七位取れたんですよ。

―え、すごい。

でもそれで満足しちゃったんですよ。で、内申って、もうオッケーから。高三はもうええやと。で、サボったら、数学七点でした。

―やばいですね。

七点はほんまやばいっす。一生の汚点ですね（笑）

―成績、なんやったんですか。三とかですか。

それは、覚えてないな。でも、二にはならなかったですね、確か。めっちゃ印象に残ってるのは先生に、「阪口、どうした」って言われたのはちよつとこつちも胸痛かったです。

―確かに、去年すごかったのに。

転落ぶりがすごい。

＊

現在の状況

―部活も忙しいでしょ。結構。

―はい。

あれですよ。バイトってできるんですか。

―今の校則ですか。六月に校則が多分変わるみたいで。基本、禁止つていうのがなくなるんです。髪染めても良くなるし、ピアスを開けても。

へえ。染めてる？

―あ、私は染めてないです。バイトも元々申請しなきゃダメだったんで

すけど、もう申請なしでも大丈夫です。

へえ。

―部活が忙しいので。

―ですよ。ちなみに、あれ、購買。開いてるんすか。

―開きました。9時半から。

―ちょっと行きませんか？

＊

―カロリーメイトいただきます（笑）

―豆乳ありがとうございます。

―いえいえ。つていうか、どこに住んではるんですか。

―大津市です

―あ、大津。湖西の方ですか。

―はい湖西線で。

―めっちゃ止まりませんか？

―めっちゃ止まります。

―風吹けば。そう。でもいい場所ですよ。めっちゃのどかやし。

―田んぼだらけです。

―琵琶湖も近いですし。景色いいですよ。ちよつと上に上がったところ、田んぼがだんだんになって、下が琵琶湖で。僕はもうずっと草津で

す。チャリ通でした。立守まで。

―いいな。

―草津は都会ですよ。

―私もよく草津に遊びに行きますね。学校終わりにエースクとか。

―エースク行くんすか。僕めっちゃ行きます。多分会いますよ。

―そうなんですか。

―僕、エースクのすぐ近くに事務所があるんです。税理士事務所が。

―私もエースクのゴンチャにもう毎週ぐらい行ってます。

―ご、ゴンチャってなんでしたっけ。

―タピオカ屋さんです。

―あー、あの赤い。つてことはフードコートに。

―はい、フードコートはもう毎週行ってます。

―僕、週二、三であの辺通ってますよ。天一めっちゃ好きで、天一で

たの嬉しいんですよ。知ってます？ 昔のアルプラ。ロフトもなくて。

―ロフトできたぐらいから行き始めました。

―あーじゃあ知らないですね。古い方。

―うん、結構栄えてきている感じですね。

―ですね。もうすごいですよ。今は若い人はやっぱり欲しいんやろうな

つて。

―ロフトできたらみんな行きますよね。滋賀にないんで。

―そうですね。じゃあ、見かけたら声かけますね。

―ありがとうございます。

＊

―点を線で繋ぐ今

―大学以降って何かしたいとかあるんですか。

―大学行っても吹部やりたいですね。

―プロなるんですか。

―いやあ、なれないと思います（笑）なんか大学の吹部って今全国で金

賞なんで、その世界見てみたいなんて。

―プロは目指さない。

―プロはさすがに。そこまでできる自信がないですね。

―元々僕は音楽してたんですよ。

―そうなんですか。

―はい。で、僕はそっちで生計立てたかったんですよ。

―え。そうなんですか。プロですか。

―プロ目指してたんですけど、でも事務所を抱える身にもなってたん

で。けど、全然食えなくてダメやったんで、二十二、三ぐらいで結局一

旦辞めて、そこから税理士の勉強し出したって感じですね。だから僕の

人生は当時、一回ボキって折れてこっち行ってるんですよ。

—へえ。

で、今税理士になって、社長になってるんで、好きなことができるようになってきたんですよ。だから youtube 事業とかもやってるんですけど。

—そうなんですか。

—そうなんです。去年から始めて。

—え。なんて調べたら、出てきますか。

いやまだ恥ずかしい（笑）でも登録者数、おかげさまでは半年ぐらいで、二四〇〇人ぐらいまで増えてきて。

—え、結構すごい。

来年とかで多分、一万ぐらいはいけるかなと思ってるんですけど。

そこで、今は税理士試験の受験生に向けて、応援するようなことしてるんですけど。これも生きてますよ、立守での経験が。

—へえ、やっぱりそうなんですね。

いっぱいプレゼンとかさせてもらった関係で、人前に立って喋るっていうのがすごい慣れてるんで、それもあって youtube で喋ったら人の心を動かせるみたいで、元気出ました。頑張ります。みたいな声が結構上がってきてて。

—え、めっちゃすごいじゃないですか。

で、そこで、その音楽活動してたのを生かして、今度その人々を励ます系の曲のカバーしようかなって。もうそれはカバーしたんですけど、予算とって、ちゃんとミュージックビデオ作って。僕出ないんですけど、なんかプロの俳優さんに出てもらってっていうのをして、来月出します。要は自分がやってきたことを、今、点でバラバラに散らばってますけど、それを繋いで大きな線にしていきたいと思います。今、できつつあるんで、そういう意味ではすごく充実してます。

*

—そういうえば、高校の時に、東日本大震災のボランティア行ってきた、

それを、それに行っていない生徒もいっぱいいたんで、やったことを持ち帰ってみんなに発表する機会があったんですよ。

—へえ。そうなんですね。

で、そのホール、守山市民ホールのおっきいホールに全校一〇〇〇人ぐらい集まって、それに僕とツツミくんっていう子と二人だけで十分ちよいのプレゼンをしたんですよ。

—ええすごい。

で、それが一番、人生の中で多くの人に喋った経験やったんですけど、それがめっちゃうまくいったんですよ。その成功体験がすごい良かったですね。そのプレゼンの資料作るのに、二、三日、ツツミくんは僕んちに泊まり込んで、一緒に練習もいっぱいしたんです。そのしんどさも相まってうまく行って、舞台袖に帰ってきたら、男同士ですけど、抱き合ってゴロゴロ転がってました（笑）

—そうなんや。すごいです。

でも、人前に出て喋るみたいなのも、いきなりその一〇〇〇人の前で絶対喋れるわけじゃないんですよ。それができたのは、いろんな授業で、人前で喋るとか、自分で考えて何かを書いて作ってみて、で、それを発表する、それにフィードバックもらって、さらにそれを改善するみたいなことをいろんな授業でさせてもらってたというのが大きいかなと思います。

—めっちゃくちゃいい経験ですね。自分はクラスの前で発表するってだけでも結構震えます。

—おっきい声で喋れます？

—多分ちっちゃいです。頑張ってるつもりやけど、多分語尾がちっちゃい。

—あー。自信がないからさばさなっちゃいますよ。

—やつぱり語尾は意識しましたか？ 語尾だけじゃなくて喋り方も。

いや、喋りは結構奥深くって、なんかおっきく強く喋ればいいっていう問題じゃないんですよ。「だってね。」っていう風にされたら、だって

ねで引き込まれるじゃないですか。そういう風な緩急も大事なんですよ。あえて、シュツとする時もあった方がいいんですよ。

―へえ。そうなんだ。私喋り苦手なんですよ。
向き不向きはありますよね。

＊

—　　そういえば、自分の嫌いなところ言っちゃった。

―ちらつと言った感じがします。「好きなことしかできない。」

—　　そうです、そうです、そうです。多動なんです。一個のことだけを
してられへんみたいな感じです。

―でもそれ結構いいところじゃないですか。

—　　そうっすね。なんかそれが存分に生かせるような環境を作ってます。

この税理士業やったら、税理士業だけしてって言われたら窮屈感してストレスなんで、空手と生け花と、茶道と、あと音楽を別にしたいです。

だから一日のうちに、やりたくなったら「これとこれ」して。みたいなことをしてます。結構趣味が多かったりして楽しいですね。だからなんかそれを色々通して自分を高めていくみたいな作業が好きなんです。何をもって高い低い分かんないですけど。とにかく、さっきも冒頭で言っちゃったけど、なんかいつでも死んでいいみたいな。

―うんうん。

—　　そうするには、なんか出し切ってることが大事なんです。自分は確かにその「多動の欲求」を全部発散できてるかどうかが大事なんで、それができてるんで、幸せ。

―なるほど。

—　　もう十分かな？（笑）

―あ、じゃあ、以上で。ありがとございました。
こちらこそ。

【感想】

阪口さんは、行動力があり高校生の頃からアクティブに活動されてお

り、経験値をどんどん積んでいって最終的に自分のしたいことを好きに叶えられるようになっていけると知れた。その行動力の根底には、「毎日死ぬように生きる」という考え方があった。立守の良い環境を存分に使って、私も、いつ死んでも悔いのないように経験を積んでいこうと感じた。



右：語り手 阪口倫造さん
左：聞き手 前川由里